

# 「ハッタツショウガイ」って、何？

はたがやメンタルクリニック  
岩田 俊

## ■ 苦難の病名の変遷

文科省は、ちょうど1年前（2022年暮れ）に「通常学級の子の8.8%に『発達障害』の可能性があると、2004年に次いで調査結果を発表しました。

数の多さに驚く人もいる一方、現場を知る人からは「やっぱり、そうか」と、実感にあった数値だと納得の声が多く出ました。特別支援教育を受けている子が他に2.9%おり、あわせて一割を超える人々が現状の学校では支援が必要で、これに加え、成人になってから生活しづらさが耐えがたくなっている人もいるわけです。

「発達障害」という表現は、わが国では2005年の法律（発達障害者支援法）に規定された独自の定義で、医療の正式な診断名とはちがうのですが、この50年程度の間に増えてきた「困った」実態にとともあった言葉になっています。

医療としては厳密さをだいに、1940年頃から、自閉症・自閉性スペクトラム障害・広汎性発達障害などとして、それぞれの時

代で診断名をかえながら、分類して治療されてきました。しかし、そうした人々の増加が速かったため、厳密な診断名に上手にあてはまらない「ボーダーライン」の人々も多く存在し、その人たちの兆候は、おかれた環境やストレスによって、激しく出現し、また、「うつ」病（35%以上）や、依存症を高率に合併していました。

また、収まった場合には、一般の人が持っていない有能な才覚をあらわし、周囲をびっくりさせるなどの様子も見られてきました。

## ■ 神経発達症というとならえ方 ICD11

そうしたなか1990年ころから当事者の自分の成育過程を表現した優れた研究があらわれ、幼児期からの視点や、かれらに見える世界が明らかになり、また、世界中での障害者の権利を求める運動の前進と相まって、WHOで「神経発達症」というくりに変えることが決まり、各国の実情に合わせて準備されています。

これらの状態を「病氣」や、障害ではな

く、表現型としての症状として扱うことになろうとしています。

2014年にわが国でも批准した障害者権利条約では、「インクルーシブな教育」が方向づけられ、障害のとらえ方として、社会モデル（「障害」は個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって創り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である、とする考え方）が強調されています。

これが基本的な世界の趨勢です。

## ■ 自閉スペクトラム症(ASD)の兆候は

「社会的コミュニケーションと対人的相互関係の課題」と、特徴的な「行動や興味、反復的な活動」が生まれた初期からみられるものとして診断される性質です。俗に空気をよむのが下手だったり、ともに時間を過ごすことへ価値を置けない傾向です。

社会性や対人関係という重要な働きの不自由な兆候が、生まれ持った「体質」と、その後の「育ち」や、今いる「生活」上のストレスから大きく変動する「症状群」をもっています。そのうえ、健常者の中にすら少しはあるような重度のものだけに限定しない“境界のない連続体：スペクトラム”という考え方です。

人の目や、全体からの評価を気にせず、自分の軸をもって、「好きなこと」を学び、追及することは、素晴らしい個性です。誰でも、少しはそういう成分を持っています。しかし、濃厚になりすぎると、現代社会では、「学びづらさ」「生きづらさ」がめだっ

## 神経発達症

- 自閉スペクトラム症(ASD)
- 注意欠陥多動症(ADHD)
- 知的発達症
- 発達性学習症
- 発達性協調運動症

てきます。そして自分なりに独自に作った世界観を、現実の多少理不尽さを含む世界に適応する修正がとても難しくなる時がある人たちです。

## ■ 乳幼児期の自閉スペクトラム症の特徴

兆候のひとつである生後早期から顕在化する部分は、「ことば」が出現する前からある「同じものを感じて楽しむ能力」が出てこないことです。なぜかという、生まれた最初の頃に「騒音」等の溢れる洪水のような刺激に、フィルターがかからないためです。

おとなの視線の先を追いかけてたり、ともに「遊ぶ」時間を楽しめないために、9カ月くらいにみられる、おとなと遊ぶ「指さし」行動が出てきません。

人間同士のコミュニケーションの中心部分は言葉や論理ではありません。「ことば」は付属物といってよい側面があるのです。

## ■ 「知恵遅れ」は治る 知的発達症

驚く人が多いのですが、過去50年間に知的障害の全体のIQは改善しました。知的障害は固定した障害といわれてましたが、古

来からいわれてきたように「知恵」がつくのが「遅い」だけの「知恵遅れ」であり、「治る」ものなのです。

従来IQという指標を決める検査で、70以下になる人を知的障害としてきましたが、同じ検査で、現在は1%を切るほどに減少しています。早期からの療育により養育者を孤立させず、子ども集団から切り離さないことで、IQは国全体で改善したのです。

だから「知的発達症」なのです。そうした見方で、ASDも成長を考えなければいけません。

## ■ 学齢期以後の支援体制

「共にいること」を楽しむ力は、焦って結果を求める環境を強要しなければ、ゆっくりですが必ず育ってきます。学校が「1人の教員と35人の子ども」という思い込みを早急に見直す必要があります。「学業成績がいい」ことをめざすわけではありませんが、各科目で国際的にトップ3の成績になる国、デンマークの例を挙げておきます。

20人学級、補助教員、13歳での個別カリキュラム、すべての18歳の人への生活費支給、親からの住居独立、が基本です。自主

的で、流動的な小集団学習が随時組み込まれています。たとえば、小学校5年生の遠足は、目的地も、一日の日程も、喧々諤々で子どもたちが決めるのだそうです。

学校は「楽しくないからいやいや行くのがフツー」という考えはやめてみましょう。

## ■ 「ハッタツショウガイ」を埋め戻す

おとなの労働の場も、おなじなのではないでしょうか。

発達段階とともに、人生課題も異なってきます。学生の頃の「クラス全員の人間関係」などは、おとなになったら「おまけ」にすぎません。それまで苦労が多かった人ほど「人間関係」処理能力を過剰に気にしますが、3分の1ほどを占める労働の時間には、選ばれた「仲間」としての関係、技術や経験に謙虚に従う関係、民主的に組織を作り上げる管理の関係だけがもとめられています。

当事者がその人らしく歩める場を提供できることと、誰もが人生を堪能できる社会はおなじだといえるでしょう

(いわた・しゅん=渋谷区)